

書評

倉野憲司氏著『古事記序文註釋』

笹 月 清 美

倉野憲司氏が大学の卒業論文を直ちに一冊の著書とし、『古事記の新研究』と題して世に問われたのは、昭和二年であつた。その書が氏の学界における地位を一挙に定めたことは言うまでもないが、それよりも特筆すべきは、その所説が古事記研究史に一時期を劃するものであり、本居宣長以来の研究に新しい展開をなさしめるものであつた事である。それ以来二十五年間、氏の研究は広く古代文学の全般にわたり、又中古以降の文学にも及んだが、しかし古事記の研究が常にその中心であり、否もつと端的に、それが氏の畢生の事業となつていゝと言つてよい。そのことは氏自身も言つておられるが、何よりも氏の業績が最もよく証明するところであつて、今夥しい述作の中、著書として刊行されているものを年代順にあげてみると、次ぎのようになる。

古事記の新研究

昭和二年

古代文学研究

昭和四年

古事記の研究

昭和六年

上中古文学論攷

昭和九年

日本神話

昭和十三年

古典と上代精神

昭和十七年

日本文学史 大和時代下

昭和十八年

古事記論攷

昭和十九年

これらの著書によつて氏は古事記の諸性質を解明し、その本質を闡明して行かれたが、その一々をここに述べる事は到底出来ないし、又その場合でもない。ただ私は氏の研究が一貫して精緻な文献学的基础の上に立つてゐる事を指摘したのである。即ち氏は文献学的な研究の上に、詩学・神話学・宗教学・社会学・民族学・民俗学・歴史学などの文化諸学による解釈を導入された。このような立場はベェクやエルツェやパウエルなどの文献学の概念からすれば、その全体が文献学的方法による研究という事にもなるであろうが、ここでは文献学をやや狭義に解し、本文批判や註釈の段階を意味せしめた。氏の研究においては註釈の段階が解釈の段階の確乎たる基礎となつてゐるのである。

一体に詩学・神話学その他の文化諸学による古事記の解釈は不統一になりがちである。一つの神話がいろいろに解釈されたり、又場所によつて違つた解釈をされたりする。いゝば解釈の多様であり、解釈の浮動である。況んや文献学的精査の基礎のない場合には、解釈は全く砂上の楼閣に等しくなつてしまふ。中には、古事記の解釈と称して、徒らに自己の思想や主張を唱道するものさえある。そうした過誤を救うのは文献学的研究による、語句の意味の一義的な統一的な確定であつて、その上に妥當な解釈が施さ

なければならない。これは心ある人の望んで止まない所であるが、それが倉野氏の研究によつて著実に実現され、今まで浮動していた解釈が一定して、幾多学界の定説を生むに到つた。氏においては註釈と解釈とが極めて密接に關聯しているのである。

古事記の註釈が氏の研究の基礎であることは右に述べた通りであるが、既に以前から、註釈そのものが論文の形で折々見えていた。『古代文学研究』に收められた「古事記の本文・訓法・解釈に關する疑」や、『上中古文学論攷』に收められた「上古文学とくさくさ」や、『古典と上代精神』に收められた「くさくさの考」など、その例である。それがいよいよ全面的に表面に出て来て古事記の一大註釈として發表され始めたについては、氏として深く決せられる所があるようである。氏はここに紹介しようとする『古事記序文註釈』のあとがきに「終戦を契機として、古事記の基礎的研究の必要性を痛感し、」と書いておられるが、その理由は、同じあとがきに、「終戦前までは古典の王座に君臨してゐた古事記も、終戦後は孤影悄然として、纔かに余命を保つてゐるに過ぎない。学界・教育界を始め、種々の方面から古事記に寄せられたあれほどの関心が終戦を契機として一朝にして去つたにつては、もとより種々の原因が挙げられるであらうが、その一つとして古事記に対する認識の不足、言ひ換へると古事記がほんとにわかつてゐなかつたと言ふ事が挙げられると思ふ。」と書いておられる言葉が、よく説明しているように感じられる。これは古事記を愛し古事記と共に生きて來られた氏の切々たる嘆きであると同時に、前にあげたような古事記解釈の浮動空疎に対する痛

烈な批判であると思う。ここに氏の學問的情熱は勃然として湧き起つたのである。

## 二

『古事記序文註釈』は氏の企図される古事記註釈の先驅として先ず序文に註釈を施されたものであるが、これだけで獨立の一卷となつてゐる。

原文は氏の作られた定本であつて、その底本には古訓古事記が用いられ、それが眞福寺本・道祥本・春瑜本・前田本・猪熊本・寛永版本・度会延佳菴頭本・田中頼庸校訂本の諸本を以つて校合されている。校定に當つては、諸本を嚴密に比較検討されるのは勿論、問題となつた文字の漢籍における用法を探つて妥當適切な改訂を施された。中でも、従来一般に古訓本によつて「開二夢歌一而想二纂二業」としていた所を、「開二夢歌一而相二纂二業」と校定された如きは最も著しい例であつて、先人未到の卓見というべきであらう。

氏は序文を三段に分ち、各段の初めに句讀点と返り点を施した原文（右の定本）を掲げ、次ぎに「校異」の欄を設けて本文決定の理由を明記し、その次ぎに原文を訓読した平仮名交りの書き下ろし文を掲げられる。

訓読についても数々の新見があるが、その理由の説明すべきものは、「註解」の欄に織り込んで述べてある。氏は「伏惟」の訓について、

普通にはフシテオモンミレバと訓まれてゐるが、それは平安

時代以後の音便による訓み方であるから、それを避けてフシ  
テオモフニと訓むことにした。(一七七頁)

といつておられるように、訓読の表記に際しては、古代の音韻に  
対応する仮名遣に従おうとしておられる事、勿論である。ただ用  
いる仮名が平仮名であるために、所謂古代の特殊仮名遣やア行ヤ  
行のエの区別などを表わすことは出来ないが、これは平仮名に伴  
なう当然の制約であるから、問題外とすべきであろう。しかし、  
字音仮名遣をどうするかというについては、古訓を標榜する  
以上、何らか一定の規準を表明すべきではあるまいか。奈良時代  
の初期には字音仮名遣の実例の徴すべきものがなく、規準を求め  
ようにも求められない。字音仮名遣の実例は先ず平安時代の初期  
になつて訓点物の中に類音の漢字を以つてするものと眞仮名によ  
るものが出て来るわけで、そこには三内入声、三内鼻音或いは  
拗音等の表記にほぼ一定の規準が認められるが、果してそれによ  
るべきかどうか、などの問題が残るように思う。なお、訓点物  
には、字音語にスのついて出来るサ行変格動詞、同じく字音語に  
ナリのついて出来る所謂形容動詞ナリ活は盛んに用いられてい  
て、それらが漢文訓読において早く成立していた事を思わせるも  
のである。むしろ漢文訓読の便利な武器といつてもよいであろ  
う。尤もナリ活はニアリの形も多い。注意すべきは所謂形容動詞  
タリ活の發生の遅れている事であつて、その点からすれば、序文  
の「元始綿邈」を、氏が宣長に従つて「元始は綿邈たれども」と  
訓まれたのは如何であらうか。従つて、「智海浩汗」を「浩汗と  
して」、「心鏡燁煌」を「燁煌として」と助詞トをつけて訓まれ

たのも一考を要するであらう。

一体に宣長も序文の場合には字音で訓む事が多いが、氏もまた  
そうで、宣長が字訓で訓んだ「蟬蛻」や「虎歩」も氏は音読して  
おられる。しかし逆に宣長が音読した「制三子近淡海」と「勒三  
子遠飛鳥」との制と勒とを訓読して共にヲサムとされたような  
例もある。これらはいずれも妥当な訓み方であると思う。

### 三

次ぎに、平仮名交りに書き下した本文について註釈が施される  
のであるが、そのために「註解」、「釈義」、「参考」の欄を設  
け、それに「補説」と「補遺」とが加えられている。「補説」は  
一箇所で、題号の所に『古事記序解詞之多麻久羅』の説の引かれ  
ているのがそれであり、「補遺」は巻末に註解を二項補つたのが  
それである。

「参考」は、題号の所と各段の終りとにあつて計四箇所。題号  
の所のは古事記序文の研究史で、そこに松下永福の『古事記序解  
詞之多麻久羅』と大宮兵馬の『古事記序文釈義』という二写本の  
紹介されている事は注目すべきである。これらは以下の註釈に大  
いに活用されている。各段の終りにある「参考」は、三つとも観  
智院本作文大体によつて各段の文章の漢文としての構造を解剖し  
たもので、最後のその後に、長孫無忌の「進五經正義表」及び  
「進律疏議表」が附載されている。これらには氏の深切な用意が  
窺われる。

かくて註釈は「註解」と「釈義」とにおいて詳細になされるの

であるが、これは各段とも、「註解」を進めては「釈義」を挿み、「註解」を進めては「釈義」を挿むという仕方であつて、各項の長短はさまざまであるが、その概数を示すと、第一段に「註解」三十項、「釈義」九項、第二段に「註解」三十六項、「釈義」三項、第三段に「註解」三十項、「釈義」四項の割になつてゐる。

「註解」及び「釈義」の意図については、凡例に「註解は語句の出典及び意義の闡明に努め、釈義は一節又は一段の意義の正確な把握を志し」と記してある。(前に述べたように、「註解」の欄には訓詁についての説明も含まれている。)語句の出典の精密な探求は、氏のこの書で最も力を尽された事の一つであつて、学界を益する事は頗る大きい。これは従来の学者も或る程度試みたのであるが、粗漏であつた。氏はこれを徹底し、經典における用例並びにその註疏、或いは説文、玉篇などの小学類に到るまで丹念に引証して、出典を明らかにすると共に意味の正確な把握に努められた。それによつて従来の説の不備を補い、誤謬を正し、新説を提唱される事頗る多く、その例は枚挙にいとまのない位である。特に

潛龍體元。沅雷応レ期。

開二夢歌一而相レ纂レ業。投二夜水一而知レ承レ基。

絳旗耀レ兵。凶徒瓦解。

愷悌歸二於華夏一。

道軼二軒后一。德跨二周王一。

乘二二氣之正一。齊二五行之序一。

設二神理一以獎レ俗。敷二英風一以弘レ國。

などの註釈は最も光つていて、氏もこの書に先だつ昨年八月の「國語と國文学」に「記序新見」と題して右の註釈を發表されたのであつたが、それが學者を刮目せしめたことは言うまでもない。

古事記の序文は、「進五經正義表」及び「進律疏議表」に準拠し、漢籍に出典をもつ美辭麗句で綴られているが、氏はそれを單なる文飾のための文飾ではないとする見解に立つておられる。即ち、序文の表現(文体・用語)は漢語漢文であるが、それはすべて古事記本文に述べられた事實を的確に踏まえているのであるとし、例えば、「乾坤初分」・「陰陽斯開」は語は漢語であるが、実は古事記の本文に即して所謂造化三神並びに岐美二神の事績を述べたものに外ならないとされる。宜長は序文の表現は虚飾であつて、古伝(古事記の本文)にはそのような意味はないとし、序文によつて本文を解釈する事を拒否した。氏は序文の表現は借用に過ぎず、それは本文の事實と嚴密に対応するものであつて、そこに安萬侶の苦心と手腕とがあり和魂漢才があるとし、その關聯を到る處で明らかにされた。従来の學者は兩者の対応關係を不確かにしか見ていなかったものであつて、氏のこの見解はこの書が精彩を放つ所以の一つであるといえよう。

氏の註釈が狹義の註釈に止まらず、直ちに解釈に連なつてゐる事は前にも述べたが、語句の註釈はその語句の表わす事實の探求へと進展し、「註解」と「釈義」と相俟つて、古事記の本質の究明に触れる多くの問題が解明されて行く。即ち、

本 教

帝紀及び本辭

帝紀及び旧辭

帝皇日繼及び先代旧辭

舍人稗田阿礼

勅 語

誦 習

稗田阿礼所誦之勅語旧辭

安萬侶の撰錄

など、古来の難問について、先人の説を洩れなく検討し、又鋭く批判し、自己の説をゆるぎなく述べて、明快な結論に達しておられる。この辺の氏の考察は非常に緻密であつて、論点の動搖、論理の矛盾などいささかも認める事は出来ない。その結論は永く学

界の定説として耀くことであらう。

以上極めて抽象的になつてしまつたが、概要を紹介したつもりである。宜長が古事記伝の著述に没頭したのは三十五年の久しい間であつた。しかし氏も今日まで既に二十五年の歳月を古事記研究に傾注しておられる。氏の古事記註釈の大著が完成する日は遠くないと信ずる。本文の註釈においては、原文の校定、訓読の確定などは勿論、古事記に関する従来のあらゆる註釈・解釈・研究を批判検討し、その本質を明らかにして、古事記伝以後のモニュメンタルな一大名著を作り上げられることであらう。

（謄写印刷限定百五十部。二百三十頁。各頁十八行、行四十五字。「あとがき」の日附、昭和二十五年十月一日。刊行、昭和二十六年三月二十日。非売品。）

（昭和二十六年五月二十五日記）